



小説の未来 (2 2)

AI小説家

春日信彦

喜怒哀楽の未来

今のスピードでゲームが発展すると、もはや、小説の出番はなくなるように思えますが、消滅はしないでしょう。というのは、人に喜怒哀楽が存在する限り、小説の持つ娯楽性は、必要だと思うからです。

小説を読むのは、だれか？それは、犬や猫ではない。また、AIでもない。当然、言語中枢と喜怒哀楽を持った人間です。だから、小説は、人間を対象に書かれています。

人には、喜怒哀楽があるからこそ、小説が娯楽となります。喜怒哀楽と言っても、各人様々です。だから、小説にもいろんなジャンルがあり、同じジャンルでも、作家の技法によって趣が異なります。

大前提として、小説に価値が生まれるには、読者に言語中枢があること、また、喜怒哀楽があることです。どちらが欠けても、小説は、価値を持たなくなります。

例えば、犬や猫には、人間には理解できない喜怒哀楽はあると思いますが、言語中枢がないので小説は読めません。AIは、言語処理という意味では、小説は読めます。でも、喜怒哀楽がないから、娯楽としての読書とはなりません。

喜怒哀楽と言っても、人それぞれです。だから、小説を読んでも、面白いと思わない人たちがいても当然です。つまり、小説が娯楽になる人たちもいれば、娯楽にならない人たちがいるということです。

ところで、喜怒哀楽は、永遠に存在し続けるのでしょうか？時代が変われば、当然、喜怒哀楽も変化します。喜怒哀楽に変化が起きれば、娯楽アイテムにも変化が起きます。

今、娯楽の主流は、ゲームです。この勢いで行けば、喜怒哀楽は急激に変化していくでしょう。そうなれば、小説の娯楽性を必要とする人たちは、減少していくことでしょう。

人は、娯楽なくして、生きていくことはできません。だから、人は、数々の娯楽を創造してきたのです。野球、サッカー、テニスなどの多種多様のスポーツ。TV、映画の放映。歴史の長い囲碁、将棋、小説。eスポーツ、ネットゲームなど。

娯楽というものには、観念的なものもあります。宗教も娯楽の一つなのです。ほかには、薬物もあります。誰もが知っている麻薬です。また、競馬、競艇、などの博打も娯楽です。

人は、喜怒哀楽がある限り、娯楽を創造し、娯楽を享受しながら生きているのです。また、人それぞれの喜怒哀楽の違いが、娯楽の創造の原動力となっているのです。今では、数えきれないほどの様々な娯楽があります。

これだけたくさんある娯楽アイテムの中で、今後も、小説は娯楽となりうるのでしょうか？仮に、今、小説がなくなったとして、他の娯楽を享受して、人は生きていけるのでしょうか？おそらく、問題は起きないでしょう。

人間小説家

小説娯楽が必要とされなくなれば、必然的に、小説家は必要なくなります。将来的に、小説家は、消滅するのでしょうか？思うに、小説が、娯楽として必要とされなくなっても、小説家は存在すると思います。

一般的に、小説は、公開される作品です。この作品は、だれのためのもののでしょうか？他人が読むためのものです。確かに、小説家は、読んでもらえることを前提に書きます。もし、だれも読まなくなれば、小説家は、小説を書かなくなるのでしょうか？

当然、販売を目的としている職業作家は、激減するでしょう。あくまでも個人的な推測ですが、販売を目的としない作家は、読者がいなくなっても、書き続けると思います。

というのは、小説を書くということは、他人のためであり、自分のためでもあるからです。以前、自分を知るために、小説を書いてほしいと述べました。小説を書くということは、娯楽を提供する文筆活動だけでなく、自分を理解するための文筆活動でもあるのです。

小説家は、娯楽作品を創造する芸術家です。だから、その時代においてどのような作品が娯楽となりうるかを知らなければなりません。そういう意味では、小説家は、時代を認識する科学者でもあります。

小説家は、時代と密接なかかわりを持っています。そのことは、とても重要なことで、小説からその時代を知ることにもなるのです。だから、小説は、娯楽作品であると同時に、歴史遺産でもあるのです。

小説家は、言語を使って娯楽を創造します。その娯楽は、その時代の人たちに向けたものです。さらに、性別や年代も考慮しています。当然、娯楽の創造ですから、因果律を基礎とする理論ではありません。

では、理論ではないから、科学性はない、といえるのでしょうか？小説は、架空の世界を描いていますから、確かに、具体的な科学性はないのです。ところが、小説には、科学性が潜んでいるんです。

それでは、どんな科学性が存在しているのでしょうか？それは、”存在の論理”なのです。ほとんどの小説家は、無意識に、この存在の論理を書き続けているのです。

以前にも述べましたが、存在の論理を簡単に言えば、表を認識した時、”同時に”、裏が存在する。作用と”同時に”反作用が存在する。有限は無限を内包し、同時に、無限は有限を内包する。この「同時に」という点が重要なのです。

当然、喜怒哀楽にも「存在の論理」が内在します。だから、小説家は、作品を創造し続けるのです。小説家は、科学者ではありません。単なる、芸術家です。だから、実用性のある理論は展開しません。

では、小説家は、何をやっているかということ、だれにも存在する”心における存在の論理”を、読者にわかりやすく、架空の世界を通して表現しているのです。ミステリー小説や恋愛小説は、典型的な作品なのです。

AI小説家

小説に”吾輩は猫である”がありますが、これは、だれが書いたのでしょうか？天才猫が書いたのでしょうか？猫を取材した夏目漱石が書いたのでしょうか？夏目漱石を名乗った幽霊が書いたのでしょうか？

おそらく、夏目漱石自身が書いたのですが、彼は、喜怒哀楽のある人間です。小説は、人間が書くものなのです。これは、疑う余地がありません。でも、小説は、AIでも書くことができるのです。

では、人間が書いた小説とAIが書いた小説は、どのように違うのでしょうか？AIが書く小説は、技術的な組み合わせで行います。喜怒哀楽の因果律を基に、小説家が創作した文を組み合わせるのです。

いわば、高度な盗作ということですが、だからと言って、人間の小説に劣るということではありません。むしろ、人間以上の小説を書くと言っても過言ではありません。

それでは、人間小説家は必要ないということになりますが、そうとはならないのです。そこで、人間とAIの本質的な違いを今一度検証してみましょう。人間の言語中枢は、記号関数と非記号関数からなっています。一方、AIは、記号関数のみからできています。

無限の創造が可能といわれるAIですが、あくまでも、人が与えた記号関数の世界での話です。例えば、AI将棋は、瞬時に無限の組み合わせができます。だから、プロ棋士にも勝てるのです。

AIが人より優秀であるためには、ある条件が必要となります。将棋の例でいえば、将棋の”不変のルール”です。将棋のように、ルールが不変の場合、AIは人間よりはるかに優秀なのです。

一方、人間には、非記号関数というものがあるのです。これは、概念と言っていいかもしれません。この非記号関数が、新たな記号関数を創造していくのです。言い換えれば、新たなルールを作り出していくのです。

簡潔に言えば、人間は、新たなルールを作り、そのルールに基づいた創造ができます。一方、AIは、与えられたルールに基づいた創造はできますが、独自にルールを作り出し、そのルールに基づいた創造はできないということです。

共生

人間小説家には、今までにない新たなルールを作り出し、奇想天外な小説を書くことができるのです。だから、AIが高度に進化して、人間よりも優秀な小説を書いても、人間の独創性の価値は存在するのです。

将棋のように、一定のルールに基づいた創造では、人間はAIにかないません。でも、そのルールを作り出したのは、人間なのです。だから、今後、AIの優秀さを人間がいかに利用していくかが大切になっていくのではないのでしょうか？

小説にも同じことがいえるように思えます。今後、AI小説家が、人間小説家を凌駕していけば、人間小説家は不要になっていきます。でも、人間小説家は、今までにない新しいルールを考え出し、奇想天外な創造ができるのです。

新しいルール、新しい記号関数、を創造するのは、人間です。AIに頼る社会になっても、人間の独創性を発揮し、AIを進化させ、共生していけば、よいのではないのでしょうか？

人間小説家は、AI小説家を良きライバルとして、切磋琢磨し、奇想天外な作品を創造して、人間の創造価値を高めていけばいいと思います。そういう意味で、人間小説家は、生き残っていけるでしょう。